

年間第二十八主日（主日の福音を中心とする「霊的な読書」）

（一）聖書朗読：マタイ 22：1-14

天の国は、王が王子のために婚宴を催したのに似ている。王は家来たちを送り、婚宴に招いておいた人々を呼ばせたが、皆は仕事のために来ようとしなかった。さらに、王の家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまった。王は怒り、人殺しどもと町を滅ぼし、見かけた人を皆集めて来た。善人も悪人も、婚宴の客で一杯になった。しかし、王は礼服を着ないで入って来た者に、手足を縛って、外の暗闇に放る出せと命令した。招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。

（二）カテキズムの響き：

『カトリック教会のカテキズム』の番号#543、796、1243-1244、1335、1382、1385
；YOUCAT #89、139、219)

あらゆる人が、婚宴のような神の国に入るように招かれています。キリストと教会とは頭として肢体として一つのもは、しばしば婚宴に与る花婿と花嫁の関係が表されています。使徒パウロは、キリストの体の部分である各信者は教会になり、婚約したキリストの花嫁であると述べています。教会は汚れない子羊の汚れない花嫁であります。キリストはこの花嫁を聖なるものとするために、ご自分をささげ、永遠の契約によって教会をご自分に結びつけ、ご自身のからだのように絶えず配慮しておられるのです。言い換えれば、キリストは頭として夫といわれ、体としての信者たちは妻と言われるのです。

新受洗者はキリストを身に纏ったことは、婚礼衣装を身に着けて、子羊の婚礼に招かれ、キリストの体と血である新しい命の糧を受けます。それは、御父の国での婚礼の会食の実現を表していますが、その時、信者たちはキリストの血となった新しい葡萄酒を飲むことになるのです。ミサは十字架上の生贄が永続する記念であると同時に、主の体と血にあずかる聖なる会食でもあります。感謝の生贄の祭儀は、聖体拝領（コムニオ）によるキリストと信者たちとの親密な一致に向けられたものです。聖体拝領はキリストご自身をいただくことです。キリストのご婚宴の招きにこたえるために、備えなければなりません。良心究明、人間の弱さ、さらに大罪を犯したことを意識しているひとは、ゆるしの秘跡を受けなければなりません。

（三）カテキズムの学び（『コンペンディウム』カトリック・カテキズム要約の番号）

#107 神の国に与るようすべての人を招いておられます。もっともひどい罪人でさえ、回心して御父の限りない慈しみを受け入れるよう、呼ばれています。

#287 感謝の祭儀は過ぎ越しの会食なのです。

最後の祈り：自然の災害、社会の平和、世界の不安のために、共同祈願を行います。
最後は栄唱で祈りを捧げます。